

# わに口

## 入山崎を歩く

入山崎区(吉田地区)は古くは「山崎村」と呼ばれ、1635年に多古藩の領地となったとき、入山崎村と南山崎村とに分割されました。

同区の日蓮宗・金蓮寺は1314年に開かれたと伝わりますが、1594年の記録に見られる「山崎常住房」が同寺の前身と考えられます。

現在、本堂には、日蓮像とともに七面天女像がまつられ

ています。日蓮宗では「七面大明神」とも呼ばれ、安産守護の神として信仰されています。この像は、もとは金蓮寺近くの七面堂にまつられていたと伝わっています。

昨年暮、かつて七面堂の正面軒先に吊り下げられていたと考えられる「わに口(鰐口)」が寺に奉納されました。铸造のわに口は、直径26cmほどで「下総国香取郡匠瑳庄山崎金蓮寺」と刻まれ、

代初期に見られます。

金蓮寺の七面大明神は多古藩主ゆかりの像で、老女の夢の中に現れた大明神の「東方の山里の徳の高い僧の住むところ」にまつられたい」とのお告げで山崎村が選ばれたといえます。1720年には飯高檀林52代化主(檀林長)による縁起書がまとめられ、その後、版木刷りが出されるなど広く信仰を集めました。

入山崎村は1850年まで多古藩領でしたが、領主が変わったことや1853年の「賽銭箱」が残されていることなどから、七面天女像はこの頃に七面堂から金蓮寺本堂に移されたのかも知れません。明治中ごろにも「安産守護神」として各婦人講社からの奉納品があります。

今回、奇特定の檀家から奉納されたわに口は、1746年に铸造された梵鐘(釣り鐘)とともに太平洋戦争で供出させられたのかも知れませんが、それから70年余りを経て、再び七面天女像の前に供えられました。

(市文化財審議会委員)

依知川雅一

問 秘書課広報広聴班

☎ 73・0080



70年余りを経て金蓮寺に奉納された「わに口(鰐口)」

「大徳院と檀家」が願主となったとあります。七面堂に奉納された年代はありませんが、大徳院が同寺21代住職で1657年に亡くなっているため、それ以前と考えられます。郡名や地名に「匠瑳庄」が使われる例は、この地域で江戸時